

「母乳育児奮闘記」

なるみ赤ちゃんこどもクリニック 鳴海 僚彦

第 18 回 男性小児科医による母乳育児支援

なるみ赤ちゃんこどもクリニック院長の鳴海と申します。仙台市太白区長町南で小児科クリニックを開業し、今年8月で5年目に入ります。病院勤務医時代に周産期医療に携わっていた事もあり、クリニック名に「赤ちゃん」を入れました。そのためか、当院には産科退院後間もない新生児やNICU卒業生が来院され、母乳に関する相談を受ける事が時々あります。主な相談内容は以下の通りです。

1. 母が内科受診時に授乳中である事を医師や薬剤師に伝えると、内服中は授乳を中断するように言われたがどうすれば良いか？（母乳と薬について）
2. 母乳のみで育てているが体重の増え方が心配（母乳不足感・体重増加について）
3. 哺乳瓶でミルクを飲むのは上手だが、おっぱいから授乳するのを嫌がってしまう（乳頭混乱について）
4. 離乳食の進みが悪く母乳ばかり欲しがる（離乳食相談）
5. 夜に頻回に起きるのでお母さんが辛い（夜泣き相談）
6. 1歳6か月健診でもう母乳を止めるように言われたがどうすれば良いか？ 職場復帰にあたっていつまで授乳を続けるか？（卒乳や断乳について）

自分が支援者として一番大事にしていることは「お母さんの考え」です。「お母さんはどうしたいのか？」「なぜそうしたいのか？」をまずお聞きして、基本的にはその考えに沿った支援を心がけています。相談者によって育児環境は多様なので、周囲のサポートの有無、職場復帰の時期、母の年齢や基礎疾患の有無、母の疲労感、母乳育児経験の有無などを総合的に勘案して、科学的な根拠に基づいた支援が必要と考えます。「母乳が赤ちゃんにとって最良の栄養であり、何物にも代えられない」事は小児科医であれば皆当然理解していますが、自分の考えの押し付けではお母さんの心は閉ざされ、もう次は相談に訪れてはくれません。特に小児科医の言葉の意味は重く、「医師の言葉は時に刃物になる」と尊敬する先輩医師から教わりました。良かれと思って言ったアドバイスが時にお母さんを傷つけてしまう事があります（自分も何度も失敗しました）。誰もが自分の考えを否定されるのは嫌なものです。相手の考えに共感しながら、赤ちゃんがどうしたら一番HAPPYになれるのか手探りでお母さんと一緒に考える事が大切と考えます。母乳育児支援に一定の基礎知識は必要ですが（自分は2011年に国際認定ラクテーション・コンサルタント資格を取得しました）、教科書やマニュアル通りにいかないのが母乳育児支援の難しい所で、やりがいでもあります。エビデンスに基づきつつもナラティブな支援が求められます。

「男性」の先生におっぱいの相談ができるの？と聞かれる事があります。母乳育児支援に興味はあるが、ハードルが高いと感じている「男性」支援者もいるかも知れません。自分は授乳に関する相談

を受けたときは、可能な限り授乳の様子を自分の目で見るようにしています。知らないおじさんいきなり「おっぱい見せて」と言われてお母さん達は大丈夫なの？と思われるかも知れませんが、心配ご無用です。「赤ちゃんが授乳している様子を見たいのですがよろしいですか？」とお願いして嫌な顔をされた事は一度もありません。むしろ感謝される事が多いくらいです。抱っこの仕方やおっぱいのくわえ方を観察し、直接アドバイスをすることもあります。もちろんうまくいく事ばかりではありませんが、ゴクゴクと喉を鳴らしておっぱいに食らいつく赤ちゃんや満足して寝てしまう赤ちゃんを見ると、こちらも幸せな気持ちに包まれます。モラルや倫理が厳しくなる昨今ですが、「男性」ももっと母乳育児支援に参加し、両親で受診された場合は、父親にも同性や先輩パパとして何かアドバイスができれば良いなあと感じます。